

満洲における幼稚園・小学校間の言葉の学びの連絡に関する思潮

A Thought about Connection in Language Learning between Kindergartens and Elementary Schools in Manchuria

池田 匡史*

IKEDA Masafumi

本稿では、満洲における、特に言葉の学びの面での幼稚園と小学校第一学年の連絡についての思潮がいかなるものであったのかを探った。具体的には、生田美記という人物が、『南満教育』誌において、1923年から *The Elementary School Journal* 誌で連載された S.C.Parker & Alice Temple による論を翻訳したことに着目し、その論考はいかなる言葉の学び観を提示しているのか、また生田はその思潮を満洲になぜ広げようとしたのかを検討した。この論考では、発達段階的に幼稚園と小学校第一学年には共通する面が大きいことから、どちらにおいても学習者中心主義的であり、多読の重視に向けた基礎を作るものであり、単元学習的とでもいうべき実践像が求められていた。これらのことは、同時代の満洲の教育界にも広げられようとしていたものと軌を一にする。そうした流れの一環として生田は、アメリカでも同様の思潮が広がっていることを根拠としながら、そのような思潮を満洲で固めようとしたのだと考えられる。

キーワード：満洲、幼稚園、小学校、国語教育、言葉

1. 問題の所在・研究の目的

満洲および旧満洲国¹における学校教育を対象にした研究は、近年いくつかの研究によって進展してきている。その中で、国語教育に関する議論については、戦後初期の国定教科書作成を中心的に行ったことにより、国語教育史の中で重要な位置づけがなされている人物である石森延男の教育営為、またはその石森が満洲に赴任中に大きく携わった現地日本人向けの教科書である『満洲補充讀本』に焦点を当てたもの（八木橋,1978; 渋谷,1992; 渋谷,1995）を除いては、ながらく「満洲」における国語教育史は検討の俎上に載せられてこなかった（宇賀神,2017,p.107）とされている。しかしながら、近年、宇賀神一が「教育実践上、教員にどのように受容され、使用されたか（ママ）いたのかという実態に迫」（宇賀神,2017,p.122）るなど、『満洲補充讀本』を手がかりとしつつ、実践面にも目を向けた研究も散見されるようになった。ただし、そのような研究は未だ数少なく、満洲における国語教育の実態は十分に明らかにされているとはいえない。たとえば、入門期の学習者に対して、いかなる言葉の学びが志向されていたのか、それについてどのような思潮が広がろうとしていたのかなど、検討の余地が大きく残されている。

また、先に述べたような入門期の学習者という視点で考えるならば、満洲の教育全体において、幼稚園での教育を検討した研究も視野に入れる必要がある。しかしながらその数は少なく、「満洲」の公教育を担っていた満鉄による幼稚園経営に着目することで、「満洲」における幼児教育の基礎状況を確認すること」（大石,2017,p.14）を目的とした、大石茜（2017）のみであるといえる。このことは、大石が、「幼稚園教育史にお

いて、外地を視野に入れた研究はほとんどなされてこなかった。特に「満洲」における幼稚園の研究は皆無である」（大石,2017,p.13）としていることにもあらわれている²。つまり、幼稚園の観点から見た入門期における言葉の学びに関する研究も、十分に存在しないのである。その要因の一つに、満洲の教育関係資料の中で、幼稚園に関する論考が少ないという資料上の制約を挙げることができるが、いずれにせよ、さらなる研究が求められているところである。

「満洲」という場所に関しては南満洲鉄道が開発した、速度や客車の冷暖房完備等の面で当時の日本としては先進的であった高速列車「超特急あじあ号」の事例など、科学技術面で日本の実験場のような意味合いもあったことは知られているが、もちろん教育に関しても、「満洲」は日本の教育改革の先導的試行の役割も果たしている」（磯田,1999,p.13）とされている。このことは、満洲における教育の実態に着目することが、わが国の学校教育の歴史的展開を明らかにする上で、重要な一面であることを示唆する。

以上のことから本稿では、満洲における幼稚園での言葉の学びに関する思潮の実態、あるいは小学校入門期を対象とした国語教育思潮の実態、またそれぞれの段階の間を連絡することに関する思潮を明らかにすることで、満洲における教育思潮の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

研究の方法に関して、まずは本稿において検討の対象とする文献について述べる。

先に述べたような状況の中にあって、貴重な資料とし

てあげられるものに、『南満教育』誌の第46号から第58号(1925年から1926年)にかけ、合計十一回にわたって連載されていた、当時の満鉄視学、生田美記による「幼稚園と第一學年との連絡」がある³。そもそもこの論考が所収されている『南満教育』誌は、山本一生が『『南満教育』は満洲教育界のおよその傾向を代表すると見なしてよい』(山本, 2012p.14)とした、関東庁と南満洲鉄道との共同組織、南満洲教育会編集の雑誌である。

生田美記訳(1925a)は、訳者によるまえがきとして、この連載について、「本篇は昨年来F(ママ)lementary School Journalの數號に互つて連載せられたかなり大部のものを抄訳したものである。」(生田訳, 1925a, p.44)と述べている。この抄訳の元となっている連載は、1923年から1924年にかけて、シカゴ大学出版局(University of Chicago Press)の刊行物である*The Elementary School Journal*誌で連載されていた、シカゴ大学のS.C.Parker&Alice Templeによる一連のものである⁴。つまり、当時のアメリカで展開された議論がおよそ二年遅れで満洲に持ち込まれようとしたのである。生田がこの論考を訳出し、紹介したのは、満洲に広めようとした何らかの価値があったのだと考えられる⁵。つまり、その内実はどうのようなのなのか、また、なぜこの論考を広めようとしたのかを検討することを通して、満洲における言葉の学びに関する教育思潮の一端を窺い知れるのではないかと考えられる。このことを検討する際には、生田による抄訳だけではなく、適宜Parker&Templeによる論考も参照することとする。

手順としては、まず、『南満教育』誌の他号において発表された生田美記の論考から、生田の人物像を検討する。次に、Parker&Templeの論の中で、言葉の学びに関わる内容を整理する。そしてその上で、満洲や内地の教育思潮と照らし合わせながら、生田がParker&Templeの論を抄訳し、満洲に広めることで、なそうとしたことを検討する⁶。以上によって、満洲における言葉の学びに関する教育思潮の一端を検討する。

3. 生田美記という人物について

では、まず、生田美記の人物像から検討する。ただし、人物の詳細について、十分に明らかにできるような資料が見当たらないため、『南満教育』誌に掲載された論考の内容や、その中の文言を手がかりとして、人物像を窺うこととする。

先にも述べたように生田は、「満鐵視學」(生田訳, 1925a, p.44)の肩書きで、Parker&Templeを抄訳した連載を開始している。生田はこの連載が始まるまでも、『南満教育』誌において、いくつかの論考を発表している。たとえば、第43号・第44号には「北米合衆國に於ける中等學校附設教員養成機關」という論考がある。また第63号で「米國のプラトウーン學校」、第70号で「北米合衆國メーン州に於ける中等學校長の職務の専門化に就ての研究」など、当時のアメリカの学校教育関係の論考をいくつか発表している。この

ことについては、生田による文章の中に、「コロンビヤ大學の附屬中小學の唱歌教授を參觀すると」(生田訳, 1925a, p.44)という文言や、「余がコロンビヤ在學中」(生田訳, 1925a, p.44)という文言があることなどから、生田はコロンビア大学に留学していた人物であり、そのことによって学校教育に関する見識の広さを得ていたことが窺える。

また、論じる対象はアメリカに関する内容のみならず、第71号・第72号では「獨逸國に於ける教員養成の現状」、第96号で「改革後の印度教育」、第105号で「ヒリツピンの教育」など、広く世界的な教育事情に関する議論も展開している。また、満洲を対象とした内容であっても、第68号「尋常科第一二三學年に於ける冬季自然科」、第74号「現代に於ける學校地理科 地理科の性質目的及他教科との關係」、第84号「中等學校生徒の學習指導問題」など、幅広い教科、教育内容、学校種の事柄に関して発言をしている人物であることが窺える。

このような人物である生田が、アメリカでの議論であったParker&Templeの論考を訳出し、それを満洲で発表しようと考えたのには理由がある。それは、生田が「教育の組織方向から考察して見ると、下は幼稚園より上は大學に至る迄、其教育方針に於て、將又其方法に於て非常に待ち／＼で、其間に統一した連絡といふことは、甚だ少い感がある。」(生田訳, 1925a, p.44)とし、当時のアメリカにおける学校教育が、「日本の様に幼稚園と小學校とを、宛も(ママ)木に竹を繼いだ様に劃然と其方法を變へてをらないのである」(生田訳, 1925a, p.45)と捉えていたことによる。つまり、生田は日本の教育において、校種の間での連携が満足に取れていないと見ていたのである。そしてこの文言は、連携がうまく取れていないという内地でのそのような教育状況を、満洲でも同様に見られるようにしてはならないという生田の考えのあらわれであるといえる。このような事情を踏まえ生田は、本稿で検討する連載を、そのような「事實の参考にもと思ふて書いたのである」(生田訳, 1925a, p.44)としているのである。

4. Parker&Templeの連載における言葉の学び像

では、生田が訳出した元である、Parker&Templeによる連載においては、どのようなことが論じられているのであろうか。主に生田の訳に沿って、この論考の中で、言葉の学びに関する内容を整理するが、適宜、Parker&Templeによる原文も用いつつ確認する。

4.1. 当該連載における課題意識

ではまず、Parker&Templeは当該連載を行うにあたって、どのような課題意識を持っていたのであろうか。

本連載の目的は、以下のようなことについて、教育関係者に了解を得ることにあるとされている。

讀方は幼稚園には不適當と考へられて居つたのが今では幼稚(ママ)が文字を容易に習得し得る能力さへあらば、或範圍迄は幼稚園に課してよいことになつて居る。然し

ながら讀方を授けるといつても、(中略＝稿者) 讀方を遊戯化し、趣味的に取扱つて、保育唱歌や、お伽話に自然に耳を傾けしめ、知らず識らずの間に幼児用の繪草紙などを讀み且つ楽しましむる道を開くのにある。(生田訳,1925a,p.45)

つまり、Parker&Temple がこの連載を行うに至った理由の一つには、幼稚園を対象として「讀方」の学習を行う必要があるということとともに、その学習が遊戯的で趣味的な形で展開されていく必要があるということを示そうとしていたことがある。また、小学校の第一学年の学習に対しても、課題意識が示されている。「旧式の」という強い語が用いられ、批判的に論じられている一年生の学習の姿とは、次のようなものである。

老紳士は彼の古い手を以て古い書物を持ちながら古いピンを以て古いページの古い文書を指しながら、吾々が十分之を讀み得る迄繰返して練習させられた、勿論、吾々は其何の爲めであつたかは少しも知らざる所である。吾々は羅馬字中の無意味な二十六字を全く覺へる爲め四、五週間を費やしたものである。(生田訳,1925a,p.47)

ここで示されているのは、教師が主体ともいふべき学習像であり、また学習者の動機は特に留意されることなく知識注入的に進められる学習像であるといえる。そしてこのような状況は、「現在とても尚舊式の第一學年を見られないことはない」(生田訳,1925a,p.46)とされている。これらのような、Parker&Temple が主張するこれから展開されるべき幼稚園における言葉の学びと、Parker&Temple が旧式であり批判されるべきではあるがその当時にも存在していたとする小学校第一学年における言葉の学びの間には、大きな差が存在していたことが窺える。そこで、本連載によって、多くの幼稚園、および小学校で、それらの間の円滑な連絡を果たせるようにしようという意図が見えるのである。

4.2. それまでになされていた幼稚園と第一学年との連絡

Parker&Temple は、ここでいう幼稚園と小学校第一学年の連絡が、これまでも以下の四つの観点から展開されようとしてきたという。

1. 幼稚園の諸活動を小学校第一學年に迄擴張
2. 小学校第一學年の諸活動を幼稚園に迄擴張
3. 幼稚園から第一學年まで團體の精神年齢交叉
4. 幼稚園と小学校第一學年に對し連絡ある教科課程、教員養成及び監督 (生田訳,1925b,pp.62-63)

はじめの1と2に関しては、それぞれの学年段階における学習活動を近づけるアプローチについてであり、3はその学習活動をそれぞれに近づけていくことの根拠を示しているもの、4はその学習活動を現実に広げていくための方法を論じたものとして捉えることができる。これら四つの観点の中で、言葉の学びに関する事柄を主

に確認していきたい。

まず1については、小学校第一学年の学習を「より多く活動的遊戯的にしたこと」(生田訳,1925b,p.63)などが具体的に示されており、それにはデューイの影響もあったという⁷。

また2について、特に言葉の学びに関することについては、「書方」と「讀方」について言及されている。「書方」については、「進歩したる幼稚園に於ても、複雑なる組織等は之を廢止する様になつた。即ち幼稚園に於ては書方は採用せられなかつたといつてよい。」(生田訳,1925b,p.65)とされている。一方で「讀方」については、「讀方は算術、書方等とは異なるを以て、孤立的幼稚園に於ても或程度迄用ひられ、幼児は之によつて精神的に自己發展をなすことが出來た。所が能力の低い幼児に對しては課せられなかつた。」(生田訳,1925b,p.65)とされている。

3については、調査の結果、「2つのグループは、精神年齢、精神能力、および同じ種類の活動に対する精神的な適応度において、著しく重複していた。」(Parker&Temple,1923b,p.96)ことを指摘するものである。ここから、幼稚園と小学校第一学年の学習内容をより似たものにしていく必要性を論じている。そのため、Parker&Temple の議論においては、特にこれらの学年差について、明確な区分けをせずに議論されている⁸。

4に関して、Parker&Temple は教員養成の観点から、教師に必要なことを含んだものとして、「(a) 教育学部の一般的な課程」を提案している。その中で、言葉の学びに関するもので、必要とされている事項は以下の三点である。

- (3) 児童文学：物語や詩などを研究したもので、幼児に適しており、それらを教えるためになすべき工夫。
- (4) リーディング：商業化されたリーディングシステムの入門書とマニュアル、プレブリマの活動、意味を捉えるためのリーディング、英語の音声学、発音の仕組み、リーディングプロセスの科学的研究、そしてリーディングのすべての段階を教えるための実用的な仕組みの詳細な研究。
- (5) 言語、作文、スペリング：これらの学年のこれらの科目における可能性と仕組みの詳細な研究。(Parker&Temple,1923b,p.100)

上記の「(4) リーディング」と「(5) 言語、作文、スペリング」に関しては、教師を目指す学生に対して、科学的に学習内容を把握させようとする意図があるものと捉えられる。そしてその中でも特に重要なのは、「(3) 児童文学」のように、学習者にとってその学習内容、学習対象が適しているかどうかを重視しようとする姿勢である。このような学習者への視点を、教員養成段階に取り入れることで、実際の幼稚園、および小学校第一学年の教育現場に、求める言葉の学び像を広げることを意

図したものと捉えることができる。

4.3. 言葉の学びに関する実践の具体像

では、ここまで論じられた内容を踏まえて推奨された、より具体的な言葉の学びの姿とはどのようなものなのだろうか。Parker&Temple は、教科選定の段階から考察を加えている。

教科選定に関する考察において、Parker&Temple は「社会的必要な五練習」として、「国語発表」、「読方」、「算術」、「書方」、「綴り」の領域を挙げ、それらに関する態度は示しておかねばならないとしている。その上で、以下のように、それぞれの領域に対する態度が示されている。

- a. 国語発表 進歩した第一學年及び幼稚園に於いては、口頭発表に就て種々の機会が與へられる。児童は彼等が家庭から持つて來た玩具やその他の材料に就て、又はクリスマスに店に買物に行つたことや、土曜日曜に於ける彼等の生活情態に就て語り合ふ外に彼等は、彼等の計畫し又は製作しつつある構成物に就て互に論じ合つて、遂には自作の讀方としての文章を作り其上彼等の會合の指導方法や接待方法に就てまで、用意する様になるのである。斯くして各児童は、多くの語彙を集め又は、發表に容易なる話頭を覺えて、之を聴衆に發表し得る自信力を有する様になるのである。
- b. 讀方 前にも述べた通り、幼稚園児童の精神年齢六歳に達した者は、多分讀方の組織的學習を始め得る様になる。斯る急速なる進歩は、第一學年に於ける普通兒にも行はれ得ることで、多數の児童は第一學年中に初歩の讀方ならば、十五、六位は讀了すべく、其外優秀なる児童は第一學年の圖書表中から適當なものを選定して、娛樂的に讀書し得るのである。(中略＝稿者)
- d. 書方 前述の如く多くの児童は、七歳以下に於ては微妙なる手の運動は不可能であるから、従つて書方の進歩は遅々たるものである。第一學年を終ると黑板練習や、軟かき鉛筆を持つて紙上に大字を書かすことが出来る様になる。
- e. 綴り 讀方練習が多く出来る割合に、綴り練習は充分出来ない。(生田訳,1925d,pp.2-3)

まず「a. 国語発表」からは、学習者の生活経験を重視するとともに、それに基づいて設定された場での具体的な活動を行うことを通して、語彙の獲得や、話し方への知識、技能、そしてそれらに裏打ちされた話すことへの自信を身につけることができる、という言葉の学び観を読み取ることができる。またこのことは、「b. 讀方」についても同様のことがいえる。Parker&Temple は、幼稚園における「讀方」のあり方の詳細について、以下のよう

1. 讀方は五歳乃至五歳六ヶ月位の優秀なる幼兒に會

得せられるばかりでなく、保育唱歌や伽話と共に愉快に使用せられる。

2. 讀方を學ぶことによつて彼等の生活の快味を一層深く感じ、其上經驗も甚だしく増加するのである。
3. 現代の遊戲化した讀方教授は在來の象徵主義や舊式の幼稚園に於ける肉體運動よりも、一層兒童をして兒童らしく愉快ならしむるものである。(生田訳,1925b,p.65)

つまり、「讀方」の學習を「遊戲化」することによって、すべての学習者が共通して「愉快的」、「娛樂的」に學ぶことを志向し、尚且つそれが生活の経験を増やすことになるようにするという志向が見て取れる。また、読書量に関する具体的な数字を出していることも注目

最後に「d. 書方」、また「e. 綴り」についてである。ここでいう「書方」とは、「Handwriting」(Parker&Temple,1923c,p.254)のことを指しており、また「綴り」とは、綴り方など作文のことではなく、「Spelling」(Parker&Temple,1923c,p.255)のことを指している。これらについては、学習者の発達段階上、充分に出来ないということを理由に、深く言及されていない。つまりこのことは、学習者に適合しないことについては、重点的にやる必要がないという見方が窺えるのである。4.2.でも示したように、学習者にとってその學習内容が適しているかどうかを重視する態度ということが

これらに見られるような学習者を重視する姿勢については、言葉の学びを設定する上で生じる様々な留意点の指摘からも読み取ることができる。Parker&Temple は學習設計において、「社会的要求」についても言及しているが、ここで言葉に関わっていることが、「社會の相違による變化」と「幼兒各自の相異なる社會的要求」である。

まず、「社會の相違による變化」については、次のように述べられている。

次に起る問題は社會の相違による變化で、例へば修養ある米國人の家庭に育てられた幼兒と、外國（ママ）を話されておる移民部落に育てられた幼兒との如きものである。後者の場合は英語に對する知識が薄い爲めに正しく話すこと、讀むこと、綴ることが困難である。全体として考へて見ても彼等の知能は、米國人の幼兒よりも低いことが見出された。兎も角も彼等の國語に對する要求は、充分に英語を消化し得る家庭の幼兒よりも異つて居ることは明瞭である。従つて國語教授の内容方法でも兩者に相違のあることが分るのである。(生田訳,1925d,p.6)

これは多民族のアメリカでの論考らしい記述といえる。満洲では「五族協和」ということばもあるように多民族の土地ではあったが、日本人向けの学校によって日本人の学習者は學んでいたのである、実践者にとっての直接

の大きな関係は少ないだろう⁹。ただ、学習者を中心に学習内容を考える必要性を強く訴えたものとして捉えることができる。

次に「幼児各自の相異なる社会的要求」については、次のように述べられている。

讀方科に就ていへば、兒童の現在及將來の要求間には、甚しき反對のある場合がある。吾人は屢々繰返して述べた通り、讀書力の増進は、兒童將來の職業の方面や、公民方面や、又は宗教的活動上、必要缺ぐべからざる練習の一である。(中略＝稿者) 併しながら讀方に對するかゝる實際的要求は、尋常科第一學年に於ては稀で、第一學年の讀方練習は、全く娯樂用の方便となるもので、是によつて彼等の快樂を増すのである。所が讀方を好まない兒童に對しては、應用の出来ない事で例へ巧妙なる教授法を以てするも駄目である。(生田訳,1925d,p.7)

この上で、学習者にとっての要求を考える際には、将来の要求と現在の要求のどちらも考慮しなければならないという。このことに関連して、Parker&Templeは、具体的な言葉の学びに関する実践像として、学習者の「本能的興味を利用する」ことを求めつつ、「緊要なる単位を中心に社会的研究を編成すること」(生田訳,1925e,p.4)を求めている。

少數の意義ある問題を深く研究して、其単位を中心として、社会的研究をなさしめることが必要である。其意義ある単位とは、家庭生活とか、雜貨屋とか、賣買とか、農業とか、運送とか又は衣服等を意味するのである。此等の研究は兒童をして、實際彼等の住む社會の要求を知り、併せて其要求に適應する方法を知る様になる。(中略＝稿者) 僅かでもよいから大きな題目を採つて、各關係を結んで、數週間も續いて之を授け、兒童をして興味を殺(ママ)がない様に注意せなければならない。(生田訳,1925e,p.4)

つまり、学習者の興味や必要性を考慮して、生活の中にまさしくある話題を軸に様々な学習・研究を行うことを、言葉の学びの具体的な實際像として推奨しているのである。もちろんこのことは、幼稚園と小学校第一学年のどちらについても対象とされていることである¹⁰。「今日完成した第一學年の教科は、其活動範圍も廣く、幼稚園と同様の遊戲や作業の材料を必要とせられておる。加之讀書力養成の爲めに、讀物の分類等も詳細に研究せられる様になつた。」(生田訳,1925f,p.23)とされるように、次に示すような研究と、その成果の活用がなされたことが指摘されている。

近頃専門家の研究によると、現在流行して居る初歩讀本や第一讀本中には、一度か二度位しか使つてゐない語があつて、而かも幼児の物語類には一寸も使用せられてゐない語があることが分つた。此發見に依て初歩の讀本は普通に使用せられる語を用ひて、彼等をして充分練習せしむることに努力する様になつた。(生田訳,1925d,p.9)

以上のような、Parker&Templeが提示した言葉の学びに関する論は、「進歩的教師の執るべき現代的思潮」(生田訳,1926,p.7)の例として示されている、次のような記述で整理されるといえる。

讀方は社会的導(ママ)を與ふものである。

吾人は現在兒童が讀むことを好む様になつたから、讀方に對しても、根本的改善を認むるものである。吾人の好奇心は長く不満足の状態にあるものではない、即ち數日前兒童は教室に飼育してある鳥を他の學級に暫く貸してやるに付ては、其飼育の方法等を知らず爲めに、何か小さな冊子様のものに書いて送りたいとの希望を起した。しかし先方の兒童は充分讀方の力がないから、先づ此小冊子の讀方から教へてやらねばならなかつた。如斯して讀方を授けることは、實際生活とも關連し趣味的にも取扱はれるし又一方に於て讀書趣味的動機を與ふるものである。此方法は吾人が昔讀方は必要上學習すべきものであるといふ風に、教訓的に取扱はれた時代と遙かの相違である。

兒童は教室内で談話をしたり動き廻ることは随意。

吾人の學校時代は必要上隣の友人と話すことさへ、教師の許可なくしては出来ないみじめな状態であつた。併し今日は變つて、必要とあれば互いに話もし又靜かに協議も出来れば、教室内を動き得るといふ權利を喜んでおるのである。

一般精神

要するに教室内の精神は、歡喜、自然的、自由、自己活動、自發的及び目的ある作業でなければならない。兒童は發達を促すべき環境に置かれ、教育法を心得たる學力ある教師に助けられ、指導といふよりもむしろ、共に作業をするといふ状態に置かれなければならない。(生田訳,1926,p.6)

このように、学習者が主体的、協働的、活動的、趣味的に言葉の学びを行い、教師はそれを支援する、という思想が本連載では示されていたのである。

5. 当時の満洲および内地での思潮との繋がり

では、これらの展開は、当時の満洲、または内地での教育思潮といかなる関連を持つのであろうか。ここでは、Parker&Templeによる論、およびそれを生田が訳出し発表したという行為の意味づけを行うこととする。このとき、学習者中心主義のなかで訴えられた多読の重視という面と、単元学習的な実践像という面の二つの側面に触れることにする。

そもそも本稿で取り上げているParker&Templeによる連載、および生田による抄訳は、日本でいう大正末期から昭和初期にあたる時代のものであるが、この時代、内地の学校においては大正新教育運動の流れのなか、学習者中心主義的な展開がなされていたといえる。このことは、満洲においても例外ではない。たとえば磯田一雄は、本稿で取り上げた連載とほぼ同時期に編纂・刊行された日本人向けの現地用教科書である『満洲補充讀本』につ

いて以下のように述べ、内地における「大正新教育運動」との連関から、学習者にとっての自由性、娯楽性を担保していたとする。

全部を扱う必要はなく、試験に出題されることもなく、時間のあるときに気楽に読んで楽しめばよかった。そのためにかえって子どもたちは喜んで読んだから、逆に国定国語読本よりは『満洲補充読本』のほうが今日でも内容をよく覚えている人が多いということになる。

これは明らかに満洲における「新教育」の一つの成果である。(磯田, 1999, pp.73-74)

そしてそこには、『満洲補充読本』の編纂に中心的に携わった石森延男が、「子どもは、もつと多量の讀物をよまねばならぬ」(石森, 1933, p.22)としたこととも関係している¹¹。つまり、学習者が楽しめるものを多く用意し、多読させることが必要であるという思想が、当時の満洲の国語教育の思潮として存在していたのである。そしてそれに向けた基礎段階ともいえる、幼稚園、または小学校第一学年段階でも、同じ方向性を見据える必要があったことが推察される¹²。

また、4.2. で示したように、デューイの影響を受けている旨の記述が見られること、また学習者の興味を重視していること、さらにいえば「緊要なる単位を中心に社会的研究を編成すること」(生田訳, 1925c, p.4)を推奨していること等に関しては、主としては戦後、日本で CIE による教育改革の流れとともに広まったとされる単元学習論を想起させるものといえる。ここでいう「緊要なる単位」という文言について、原語では、"significant thought units"(Parker&Temple, 1923c, p.267)となっている。つまり、「単元」を意味する "unit" という語が使用されているのである。"significant thought" という文言が指し示すものの例として示されていた「農業」などは、具体的に示されてはいないが、周囲の土地で育てられていて、実際に食すことのできる野菜について調べたり、それを実際に育てたり、毎日の水やりをしたり、観察日誌のようなものを書いたり、野菜を育てることに関する読み物を読んだり、などという様々な学習活動を組み合わせた単元を想定することができよう。そこには、小学校段階でいう教科の考え方を柔軟に考えている学習像が想像できる。

このことについて、近代教育のカリキュラム編成の実態を検討した橋本美保は、「大正新教育と呼ばれる教育運動の中で展開した合科学習やプロジェクト・メソッドなどの実践においては、従来の教材単元の枠組みを超えた単元が創出されており、そこに何らかの単元論が存在した可能性がある。」(橋本, 2009, p.1)としていた。これを踏まえると、生田が満洲に広めようとしたものは、橋本のことばでいう「何らかの単元論」の思想の一つとして位置づけられるのである。

生田がこの連載を訳出し、『南滿教育』誌で発表したことは、満洲で広められようとしていたような思潮がア

メリカで具体的に広げられようとしていることを根拠としながら、その思潮を固めようとした意図があったものと考えられるのである。

6. 結語

以上、満洲の幼稚園と小学校第一学年の、言葉の学びの面における連絡についての思潮がいかなるものであったのかを、生田によって広められた Parker&Temple の論を手がかりに探ってきた。

生田が訳出した元である Parker&Temple の論において示されていた幼稚園と小学校第一学年における言葉の学び観は、どちらの学年段階も同様に、社会的要求を踏まえつつ、活動主義的、遊戯的なものにしようとする発想のもとで展開されていた。その発想に基づき、幼稚園と小学校第一学年の、どちらの学年段階の学習活動においても、互いにその内容を近づけていくことが目指されていたのである。そしてそれは、当時満洲で広がっていた、学習者中心主義のなかで多読を重視していくことの基礎段階として位置づけられるものであるとともに、具体的な実践レベルでみると、学習者の生活にまさしく存在する話題を軸に学習活動を組むという、生活単元、単元学習的な実践像であったといえる。また、このような考え方による学習は、より年長の学年段階においても、満洲の学校教育では展開されることとなる。つまり、本稿で取り上げたような学び観に基づいた教育を受けた当時の満洲の幼稚園、および小学校第一学年の学習者たちは、その後も同じ方向性をもった学習を受けることになったのである。Parker&Temple の論を訳出したこの論考からは、そうした教育思潮の基礎段階としての立ち位置を明確に打ち出し、満洲内で固めようとした生田の意図が読み取れた。このことは、当時の日本の教育状況においては、先進的な取り組みとして位置づけることができるであろう。このような点を明らかにしたことに、本稿の意義は認められると考えられる。

本稿の課題としては、資料上の制約があるものの、満洲における実践されたレベルで幼稚園と小学校第一学年の連絡を意識した単元学習的な形を取っているであろう取り組みの報告を発掘するとともに、その実践に流れている思潮を明らかにすることが挙げられる。また、はじめにも述べたように、「満洲」は日本の教育改革の先導的試行の役割も果たしている」(磯田, 1999, p.13)とされる。このことから、実践レベルでの検討に関しては、当時の内地における実践との比較も行う必要性がある。

【注】

- 1 本稿では、地名で使用される「洲」と「州」の表記に特別な差異を意図していない。また、「旧満洲国」の建国宣言は 1932 年であるが、それ以前も在留邦人対象の教育營為はあった(野村他, 1995, p.21)ため、この箇所では「旧満洲国」という表現をしているが、以降では、時代性を規定する語ではなく、地域性を規定する語として、「満洲」を用いる。

- 2 さらに大石は、「『満洲の教育史』においても、初等教育、中等教育、女子教育、中国人教育など様々な教育が研究対象とされてきたにもかかわらず、幼児教育が取り上げられることはなかった」(大石,2017,p.13)と述べている。
- 3 ただし、一連の論考のなかで、(三)が収録されている『南満教育』第49号に関しては、教育ジャーナリズム史研究会編(1994)の中でも「不詳」(教育ジャーナリズム史研究会編,1994,p.1)とされているなど、資料の都合上、検討が困難なものもある。
- 4 Parker&Temple(1923a)では、「この連載は、シカゴ大学教育学部によって、再印刷し、パンフレットの形態として売り出す予定である」(Parker&Temple,1923a,p.13)とされている。またこの論考に関しては、アメリカの幼稚園教育の発展過程を明らかにした上野辰美(1995)も、20世紀に入ってから幼稚園設置数増加に関する記述の中で、この文献に触れている。
- 5 内地においては、『学習研究』誌において、山口勲訳(1927,1928)が同様のものを訳出している。これは、生田訳(1926)と、その範囲を一にするものである。
- 6 本稿では、生田により訳出されたものと、原文とを区別して引用するために、引用箇所の表示において「生田訳」と「Parker&Temple」と示し分けをしている。なお、『南満教育』誌の各号の目次においては、Parker&Templeの名前は登場せず、生田の名前のみが示されている。
- 7 生田は詳細に訳してはいないが、Parker&Templeは、デューイの実験学校の影響により、「1910年には、多くの学校の第一学年で、幼稚園の精神と活動が浸透するまでになった」(Parker&Temple,1923a,p.25)としている。また、磯田一雄は、満洲の教育思潮について、「その背後にはアメリカのデューイの影響を受けた当時の中華民国の教育改革の姿がある。」(磯田,1999,p.14)と述べている。このことに関して、李春は、中国とデューイの関係について、次のようなことを述べている。

デューイは訪中の前に、民主主義教育をアジアで実現する大きな希望をもって日本を訪ねた。ところが、日本の社会と教育の状況はデューイを失望させた。それに対して、封建的な帝王制を覆したばかり、民主と科学を提唱する運動をすさまじい勢いで展開していた中国は、日本と鮮烈な対照を現した。日本に絶望したデューイは、自分の教育理想が中国で実現することができ、中国は民主主義が育つ素地だと強く感じた。(李,1997,p.15)

- 8 生田訳(1925f)では、訳者による注として、次の文言が示されている。

譯者曰く、幼児と児童とは共に Children なる語を使用してある爲め、場合によつて幼児と児童との二譯語を使用せんかとも思ふたけれども、幼稚園と第一学年との聯絡であるから、どうも二語を明瞭に使い

分けることは困難の場合が多々あるから児童の一語だけを使用することにしたから讀者の了解を乞ふ。(生田訳,1925f,p.23)

- 9 ただし、中国人用の教科書を南満洲教育会で編纂していたということもあるため、満洲教育界全体で見ると関係なものではない。
- 10 ここで示されていることは、既存の教科の枠組みに囚われた発想ではないといえる。注5で示したように、内地においては山口勲によって『学習研究』誌で抄訳が扱われることになったが、合科学習を志向していた奈良女子高等師範学校附属小学校の雑誌であるこの媒体で発表されたことは自然な流れのものといえる。
- 11 石森延男は、『満洲補充読本』の編纂趣意として、「なるべく満蒙の風物事情を記することにつとめ、在満児童の生活に親密な新鮮な材料を蒐集し、主として満蒙支那を諒解せしめ且つ郷土觀念を培ひ、なほ満洲初等國語教育をして一層充實せしめんことを目的としたものである。」(石森,1931,p.22)と述べている。
- 12 後に木下竹次が、満洲における教育のあり方に対する意見として、以下のようなものを挙げているが、ここでの文言も Parker&Temple による議論と軌を一にしたものといえよう。

従来日本の教育は主として認識から實行に導く方法を採用した。又分析的に知識を與えて其の結果は知識の積集に終る憾みがあつた。其の知識を綜合して實際生活を改善して行くことは卒業後に移して居た。此の如き方法は今は日本内地でも行詰つて居る。まして満洲の如き所に之れを適用しては效果は舉らない。(木下,1932,p.45)

【参考引用文献】

- 石森延男(1931)「改訂満洲補充読本「一の巻」について(一)」『南満教育』第108号,pp.22-32
- 石森延男(1933)「國語教育庭散歩」『南満教育』第132号,pp.20-23
- 磯田一雄(1999)『「皇国の姿」を追って—教科書に見る植民地教育文化史—』皓星社
- 上野辰美(1995)『アメリカ幼稚園教育の公教育性発展過程に関する研究』風間書房
- 宇賀神一(2017)「『満洲』の國語教育実践における『満洲補充読本』の位置」『植民地教育史研究年報』第20号,pp.106-126
- 大石茜(2017)「『満洲』における幼児教育の展開—満鉄経営幼稚園の事例から—」『幼児教育史研究』第12号,pp.13-27
- 木下竹次(1932)「新満洲に於ける日本人の教育」『学習研究』11巻5号,pp.39-49
- 教育ジャーナリズム史研究会編(1994)『教育関係雑誌目次修正第四期・国家と教育編第24巻』日本図書センター
- 渋谷孝(1992)「解説」石森延男著、渋谷孝編・解説『現代國語教育論集成 石森延男』明治図書出版,pp.480-

- 518
 渋谷孝 (1995) 「改訂石森延男年譜と新資料—現代国語科教育史論のために—」『宮城教育大学紀要第1分冊』第30巻, pp.183-202
 野村章・野村章先生遺稿集編纂委員会 (1995) 『『満洲・満洲国』教育史研究序説—遺稿集』エムティ出版
 パーカー・テンブル、山口勲訳 (1927) 「幼稚園尋一統合教育案 (一)」『学習研究』6巻12号, pp.91-100
 パーカー・テンブル、山口勲訳 (1928) 「幼稚園尋一統合教育案 (二)」『学習研究』7巻2号, pp.85-95
 橋本美保 (2009) 「1920年代明石女子師範学校附属小学校における生活単元カリキュラムの開発—近代日本における単元論の受容に関する一考察—」『カリキュラム研究』第18号, pp.1-15
 八木橋雄次郎 (1978) 「石森延男先生と国語教科書」石森延男『石森延男国語教育選集第5巻』光村図書, pp.493-512
 山本一生 (2012) 「『南満教育』における新教育の思潮」『植民地教育史研究年報』第14号, pp.11-28
 李春 (1997) 「デューイの訪中講演に関する一考察」『アジア教育史研究』第6号, pp.14-29
 S.C.Parker&Alice Temple(1923a)Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.I, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.1, pp.13-27
 S.C.Parker&Alice Temple(1923b)Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.II, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.2, pp.93-102
 S.C.Parker&Alice Temple(1923c)Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.IV, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.4, pp.253-269
 S.C.Parker&Alice Temple(1924a) Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.V, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.5, pp. 333-347
 S.C.Parker&Alice Temple(1924b) Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.VI, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.6, pp. 413-429
 S.C.Parker&Alice Temple(1924c) Unified Kindergarten and First-Grade Teaching.VII, *The Elementary School Journal*, Vol.24, No.7, pp. 493-506
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925a) 「幼稚園と第一學年との連絡 (一)」『南満教育』第46号, pp.44-48
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925b) 「幼稚園と第一學年との連絡 (二)」『南満教育』第47号, pp.59-65
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925c) 「幼稚園と第一學年との連絡 (四)」『南満教育』第50号, pp.17-26
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925d) 「幼稚園と第一學年との連絡 (五)」『南満教育』第51号, pp.2-9
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925e) 「幼稚園と第一學年との連絡 (六)」『南満教育』第52号, pp.2-5

- S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1925f) 「幼稚園と第一學年との連絡 (七)」『南満教育』第53号, pp.16-23
 S.C.Parker, Alice Temple 述・生田美記訳 (1926) 「幼稚園と第一學年との連絡 (終編)」『南満教育』第58号, pp.2-13

【付記】

本研究は JSPS 科研費 JP 19K14201 の助成を受けている。